平成31年度

入 学 試 験 問 題

第1回

国　語

1　問題用紙は監督者(かんとくしゃ)の指示があるまでは開いてはいけません。

2　開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。

3　答えはすべて解答用紙に記入して下さい。

4　記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点(くとうてん)や符号(ふごう)は一字として数えるものとします。

5　問題は1ページから16ページまであります。

受験番号		氏名	

森村学園中等部

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

テレビアニメの『ドラえもん』を、きみたちの多くは見たことがあるでしょう。『ドラえもん』の主人公たちは、しょっちゅう、近所の＊土管のある空き地で遊んでいます。こんな空き地は、一九六〇年代から七〇年代にかけては多くの都市に見られました。一九六三年生まれの私は、ちょうど『ドラえもん』を同時代で体験したのですが、私の住んでいた東京の池袋の周辺にも多くの空き地があり、そこで近所の子どもたちと草野球や缶蹴りなどをして遊んでいました。

そのような空き地は、将来に何かを開発するためのあいだの、＊暫定的な土地の使い方に過ぎなかったのです。土管も、子どもが遊ぶためのものではなく、その土地に建物をつくるときに地面に埋めて使うためのものだったのです。それにもかかわらず、子どもたちはあたかも、その空間を自分たちが共有しているかのように自由勝手に使っていたのです。それは、①本来的な目的とはまったくちがった使い方でしたが、子どもたちにとっては、自分たちによって管理された、自分たちのための空間であるかのように思えていたのです。『ドラえもん』のストーリーを展開するうえでも、空き地はとても重要な役割を担っていました。そこは、大人という管理者から解放された、子どもによる民主主義的な話し合いなどが展開される場であったのです。

富山県高岡市に市民の憩いの場所として一九九六年につくられた「おとぎの森」という公園があります。ここに「ドラえもんの空き地」という空間があります。しっかりと土管もおいてあります。それは、意図せずにつくられた子どもたちの空間である空き地ではなく、計画されてつくられた空き地です。さて、②この空き地は、ほんとうに空き地なのでしょうか。ドラえもんや、私が子どもの頃に遊んでいた空き地とは、何かがちがうように感じます。どこがちがうのでしょうか。

「ドラえもんの空き地」は、高岡市役所が計画をし、「森のふれあい倶楽部」が整備と管理をしています。それを計画するうえで、住民の意見は多少聞いたかもしれませんが、若いきみたちや子どもたちの意見をどれほど聞いたでしょうか。

一方で、『ドラえもん』に出てくる空き地、もしくは私が小学生の頃、三角ベースなどをして遊んでいた豊島区の空き地は、あくまでビルを建てるまでの暫定的な状況にあったので、もちろん空き地として計画されていませんでしたし、整備もされていませんでした。釘がついたままの板や、それこそ土管などが放置されていて、安全管理もされていなかったので、ケガをする危険もあったかもしれませんが、その空間は子どもたちが好き勝手に使うことを可能としていました。

もちろん、空き地で遊ぶことは禁じられていました。しかし、それは建前で、子どもたちは怒られても、大人たちの目を盗んで遊んでいたものです。そのようなときにこそ、いろいろとおもしろいアイデアを思いついたり、抜け目なさなどを学んでいたりしたように思います。そして、なにより、与えられた条件を最大限にいかして楽しむための創造力が培われたかと思います。

『二〇世紀少年』という浦沢直樹による漫画作品では、一九六九年に主人公のケンジが同級生の仲間たちと秘密基地を空き地の原っぱに

ようなショッピングセンターが、子どもたちが勝手に遊んでいた空き地をつぶしてつくられたりしたら、とても悲しくなりますし、怒るかもしれません。③前述した『二〇世紀少年』でも、ケンジたちの秘密基地はボーリング場になってしまいます。

そんなことを言っても、若者は無力であると思うかもしれません。しかし、若者のこのような主張が通って、ショッピングセンターの開発を*阻止した事例もあるのです。デービス市の事例です。

市の中心には、セントラル・パークと呼ばれる公園があります。ここでは水曜日、土曜日にファーマーズ・マーケット（農産物直販所）が開催され、五〇〇〇人もの人を集めます。多くの人がこの場所を「デービス市でもっともすてきな場所」と言うような、魅力あふれる空間です。

この場所は昔から、公園として人々に親しまれていました。ファーマーズ・マーケットも一九七四年から開催されるようになりました。しかし、一九八五年、市議会はこの公園を、ショッピングセンターと*シネマ・コンプレックスなどを備えた複合的施設をつくるために、*ディベロッパーに売ることを決議しました。

市民グループはそれを阻止するために、その*是非を問う住民投票をおこなうべきであるという運動を展開しました。そして、住民投票は支持され、その結果、公園として再整備されることになったのです。そこで住民たちが選んだ公園のデザイナーは、地元の大学で*教鞭をとるマーク・フランシス教授でした。彼は、開発される場所の住民を巻きこんだデザインをすることで知られていた設計者で、公園の再整備においては、選挙権のある大人だけでなく、若者や子どもにも多くの意見を聞くことになりました。その結果、子どもたちが楽しめる水遊び場や若者のための集会施設、庭園などがつくられる一方で、市議会議員が主張していたペットのための遊び場は却下されました。

若者が主体となったわけではないかもしれませんが、若者や子どもにも配慮した大人が空間のあり方を検討したために、大人視点ではないみんなの空間がつくられることになったのです。

しかし、④問題は、多くの都市にはデービス市で活躍したようなフランシス教授のようなデザイナーがあまりいないということです。その結果、若者や子どもたちが利用することを配慮しないまちづくりがなされてしまっています。フランシス教授がいない場合は、どうすればいいのでしょうか。

それは、ドラえもんやのび太が遊んでいた空き地をとりもどすことだと思います。とはいえ、空き地はもはや昔のようには多くありません。空き地は開発が進むまでの短期間において出現する空間であり、開発がされてしまったら、消えてしまいます。

それでは、空き地についで、若者や子どもたちが使える空間はどこかと考えると、それは公園や広場になります。これらは、基本的に税金によってつくられる公共空間であり、所有するのは住民全員になります。若者や子どもたちは、税金は払っていないかもしれませんが、これらの公共空間の立派な所有者です。もちろん、あるていどのルールを守らなくてはならないかもしれませんが、より自由度が高い、きみたちがその使い方を提案することが可能な空間です。

（中略）

つくることから、物語が展開していきます。この秘密基地は、まさに小学生にとって誰からもじゃまされずに、自分たちの空間です。それは、大人から押しつけられた空間ではないのです。しかし、一九六九年にはつくれた秘密基地は、現在ではなかなかつくれないかと思います。それは、そのような子どもたちが自由に秘密基地をつくれるようなすきまが、社会からなくなってしまったからです。

「おとぎの森」の「ドラえもんの空き地」とはちょっと位置づけはちがいますが、管理されたレジャー空間としては、東京ディズニーランドがあげられます。

東京ディズニーランドはおもしろいところだ、と私も思います。なにしろ、東京ディズニーランドが提供する商品は「楽しみ」なんですから、楽しみたいと思ったら行くというのはまちがっていないと思います。

しかし、東京ディズニーランドの遊びはすべて受け身です。自分たちが何か楽しむという工夫をする余裕を、いっさい与えてくれません。というか、むしろ、規制だらけです。加えて「楽しむ」ためにはお金がかかります。お金が稼げないきみたちには、これはずいぶん不自由な場所ではないでしょうか。

そして、何よりも東京ディズニーランドの土地は私有地です。他人の土地です。そこでは、入場者は「お客様」なのです。けっして「主人公」にはなれません。「お客様は神様です」という言葉がありますが、ディズニーランドの「お客様」はじつは多くのルールにしたがわなくてはならないのは知っていると思います。［Ⅰ］、つぎのようなルールがあります。

まず、お弁当をもって行き、自由勝手に食べることは禁止されています。お弁当をもって行った場合は、いったんディズニーランドの外に出て食べなくてはなりません。パレードやショーの一時間以上前から、レジャーシートなどを利用して待つことは禁止されています。きみたちには関係ないかもしれませんが、喫煙は携帯灰皿をもっていてもダメですし、お酒も飲めませんし、もちこみも禁止です。加えて、奇抜な服装の場合は、入園を断られたりもします。

お金を払い、これらのルールにしたがうのは窮屈だと思います。もちろん、社会という共同体で生活していくうえでは、多くのルールにしたがわなくてはなりません。［Ⅱ］、思い切り遊びたいのに多くの制約を受けるのは、ちょっとおもしろくないかもしれません。

同じようなことは、ショッピングセンターでも指摘できます。私は仕事柄、多くの都市を訪れ、写真を撮影しますが、ショッピングセンターで写真を撮影すると、警備員がどこからともなくあらわれ、撮影を止められます。

（中略）

ちょっと写真撮影をしただけで、怪しいかもしれないとチェックをされるのが、このようなショッピングセンターの特徴です。日本ではそうでもないかもしれませんが、とくにアメリカのショッピングセンターなどは、いかにも「みんなのための空間です」という雰囲気を演出していながら、不要な人を排除するような管理がされています。

不要な人とは、このショッピングセンターでお金を使わない人です。とうぜん、お金をもっていないきみたち若者を含みます。もしこの

若者や子どもが育つのは、家と学校だけではありません。家と学校のあいだを埋める*膨大な空間でも、若者や子どもは育ち、多くのことを学びます。しかし、そのためには受け身ではなく、積極的にならないといけません。

（服部圭郎『若者のためのまちづくり』より）

※　問題作成の都合上、文章の一部を書き改めたり、省略したりしたところがあります。

（注）
*土管……………………粘土を焼いて作った太い管。下水管などに使われる。
*暫定……………………仮に決めておくこと。
*シネマ・コンプレックス……複数のスクリーンがある大型映画館。
*ディベロッパー…………大規模な土地開発業者。
*阻止……………………邪魔をして止めさせること。食い止めること。
*是非を問う……………良いか悪いかを尋ねること。
*教鞭をとる……………教師として学校で教えること。
*膨大……………………規模が大きい様子。数や量が非常に多い様子。

問一　——①「本来的な目的」とありますが、その空間の本来の目的とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　近所の子どもたちをそこで一緒に遊ばせることで、社会性を身につけさせること
イ　都市を開発する間、そこに資材を置いたり、一時的に空けておいたりすること
ウ　ビルを建てている時に、工事で出た土砂や要らない土管などをそこに捨てること
エ　子どもたちをそこに集めて、民主主義的な話し合いをする練習をさせること

問二 ――②「この空き地は、ほんとうに空き地なのでしょうか」とありますが、筆者の考える「ほんとうの空き地」で遊ぶことによって、子どもたちにはどのような能力が育まれると筆者は考えていますか。それについて述べた二十五字の部分を求め、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

問三 [Ⅰ]・[Ⅱ]に当てはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり　イ すると　ウ しかし　エ さて　オ たとえば

問四 ――③「前述した『二〇世紀少年』でも、ケンジたちの秘密基地はボーリング場になってしまいます」について、次の問いに答えなさい。

（1） 本文中の===部は本文の内容をもとに考えると、それぞれA「秘密基地」とB「ボーリング場」のどちらに近いと考えられますか。その組み合わせとして正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア A ショッピングセンター　B （筆者が遊んでいた）豊島区の空き地
イ A 東京ディズニーランド　B ショッピングセンター
ウ A （筆者が遊んでいた）豊島区の空き地　B 『ドラえもん』に出てくる空き地
エ A 『ドラえもん』に出てくる空き地　B 東京ディズニーランド

（2） 「ボーリング場」や（1）で「ボーリング場」に近いとした場所に、筆者はどのような共通した特徴を見出していますか。それを説明した次の文の[ア]から[ウ]に入る言葉を三字以内で本文中からそれぞれぬき出しなさい。

○ [ア]を持っていないこどもや若者は遊ぶことができない点
○ 客は「お客様」として、施設が提供する「楽しみ」を[イ]の態度でしか楽しむことができない点
○ 遊ぶためには大人の決めた[ウ]に従わなくてはならず、窮屈に感じられる点

問五 ――④「問題は、多くの都市にはデービス市で活躍したようなフランシス教授のようなデザイナーがあまりいないということです」について、次の問いに答えなさい。

(1) フランシス教授のようなデザイナーがいないことが、なぜ問題なのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 若者の感性を取り入れて空間をデザインするフランシス教授のような人がいないと、ただ古い伝統的な街並みを守るだけで新しさを取り入れた機能的な空間はできないから。

イ 様々な年代の住人の意見を取り入れて空間をデザインするフランシス教授のような人がいないと、大人目線のデザインになりがちであり、子どもにとっても有意義な空間は作れないから。

ウ 子どもや大人、老人など様々な立場に立って空間をデザインするフランシス教授のような人がいないと、農産物直売所など魅力的なアイデアで町に人を集めることはできないから。

エ 住民の声を一つにまとめて空間をデザインするフランシス教授のような人がいないと、市民を率いて住民投票を提案したり、住民の総意をまとめて市議会に対抗したりできないから。

(2) この問題の解決にむけて筆者はどうするべきだと述べていますか。「空き地をとりもどすこと」以外の筆者の考えを、三十五字以上四十五字以内でまとめなさい。

問六 この文章で述べられている内容として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一九六〇年代から七〇年代にかけて多く見られた空き地には、子どもが自由な発想で遊べるように、土管などが置かれていた。

イ かつて子どもが空き地で遊ぶことを大人たちは建前として禁止していたが、子どもは自分たちの共有地のように空き地で遊んでいた。

ウ 現在では、子どもたちが家の中でゲームなどの遊びをするようになったために、都市から空き地が姿を消すようになった。

エ デービス市の事例では、多くの世代の人が楽しめるという点で、空き地よりも公園の方が理想的な空間であることを述べている。

問七　本文の特徴について述べた文章として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　アニメやテーマパークといった理想の世界にあるものと、現実の世界にあるものを対比させて遊びの本質について考えている。

イ　前半では筆者が考える解決策とそれを実践した海外の例を紹介し、後半では問題を生み出している背景を細かく分析している。

ウ　「秘密基地」と「東京ディズニーランド」の共通点を挙げながら、子どもが楽しめる場を創造するヒントを導き出している。

エ　遊びの場について具体例を比較することで違いを明確にし、最後に子どもたちの空間を獲得する方法について提案している。

問八　本文で述べられている筆者の考えをもとに次のアからエの遊びを見たときに、筆者はどの遊びを高く評価し、どの遊びを低く評価するとあなたは考えますか。

（1）筆者の評価が最も高いと思う遊びと、最も低いと思う遊びを次のアからエから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　トランプ　　イ　人生ゲーム　　ウ　ポケモン・ゴー　　エ　積み木

（2）あなたが（1）のように考えた理由を、作者の考えにもとづいて説明しなさい。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

佐倉家のふたごの妹「由仁」は難病にかかり、ピアノを弾くことができなくなった。また、妹を思うあまり、姉「和音」もピアノを弾くことをやめてしまった。その佐倉家から調律師の「柳さん」に久しぶりに依頼があった。その時には同じく調律師である「僕（外村）」にも同行してほしいという。

予定を合わせて佐倉家を訪問できたのは、一週間後の午後遅い時間だった。
佐倉さんの奥さんが、穏やかな笑顔で出迎えてくれた。
「お待ちしていました」
「お久しぶりです」
「お騒がせしました」
奥からふたごが出てきて、揃ってお辞儀をした。
明るい声でほっとした。
「またよろしくお願いします」
「こちらこそ」
柳さんもにこやかに答える。
「また*調律に呼んでいただけてうれしいです」
後ろで僕も頭を下げる。ほんとうに、連絡がない間ずっと胸に大きな石がつかえているみたいだった。それが、ようやく動いた。
ピアノのある部屋へ通されて、
「何かリクエストはありますか」
柳さんが聞く。
「おまかせします」
ふたごは声を揃えた。
「では、何かありましたらいつでもおっしゃってください」
彼女たちが部屋から出ていくと、柳さんは上着を脱いでピアノの椅子に置いた。
よく磨かれた黒いピアノを開ける。トーン、と白鍵を叩く。基準音のラはほとんど狂っていない。柳さんの調律をこうして近くで見るのも

久しぶりだった。この頃は単独で調律するばかりだ。
ふたりで来てほしいという依頼の理由を考える。どうして僕も呼んだのだろう。以前、由仁が店へ来て、病気のことを話してくれた。そうした以上は僕にも声をかけるのが礼儀だと思ったのか。
柳さんが調律している間、いろいろな考えが浮かんでは消える。
この部屋は防音のしすぎだ。ピアノの足に防音装置を付けているのはもちろん、その下に毛足の長いカーペットを敷き、窓には分厚い防音カーテンが二重に掛けられている。前に来たときは、ずいぶん慎重な家庭なのだろうと思っただけだった。マンションだからしかたがないのだろう、と。でも、今は別の気持ちが強くなっている。もったいない。これではせっかくのピアノの音が半分は吸い込まれていってしまうだろう。和音の弾くピアノの魅力も半減してしまうということだ。
そう気づいたら、①ぞくぞくした。半減して、あれか。
柳さんが弦の下に布を挟む作業をしている間に、両手を叩いてみる。ぱん、と乾いた音が鳴ってすぐに消える。残響はほとんどない。さらに、窓の上から床まで下ろされた防音カーテンを開けて、また両手を叩いてみる。ぱんっ。わずかながら、はっきりと残響が長く聞こえた。昼間に弾くときぐらいは、この重いカーテンを開けて弾いてもいいんじゃないだろうか。

「閉めて」
ピアノに屈み込んだまま、柳さんが言う。
「いつも閉まってんだから、閉めた状態で調律したい」
「でも、もったいないです。開けて弾いたほうがいいです」
「わがままだなあ」
「えっ」
驚いた声に、柳さんが顔を上げる。
「なに驚いてんだ」
「すみません」
わがままだと言われたのは、記憶にある限り、生まれて初めてのことだ。
「わがまま、って、あの、僕のことでしょうか」
思わず確かめると、柳さんは眉間に皺を寄せてこちらを睨んだ。
「この部屋にいるのは誰だ。俺と外村だ。そして、俺は今仕事をしている。わがままは言ってないつもりだ。俺がわがままじゃないとしたら、さて、誰がわがままだと思う」

「はい」
右手を挙げた僕に、よろしい、と柳さんはうなずいてみせた。
しかたなく、一度開けたカーテンを戻す。音を遮るだけでなく、光も遮ってしまう。もう一度僕はカーテンを開けた。夕刻のやわらかな日差しが差し込んでくる。
「おい」
「はい」
しぶしぶ閉める。②もったいない、という思いを捨て切れない。
「こどもかよ」
こどもだなんて言われたのも、生まれて初めてだった。そうか、こどもか。ふ、と笑みが漏れる。③なんだか気持ちが軽くなった。そうか、こどもか。わがままか。
「なに笑ってんだ」
「いえ、すみません」
謝る声にも、笑いが混じっていただろう。
やっと、わがままになれた。これまでどうしてわがままじゃなかったんだろう。聞き分けがよかった。おとなしかった。いつも弟に押されていた。通したいほどの我がなかった。今、わがままだ、こどもだ、と指摘されてわかった。僕は、ほとんどのことに対してどうでもいいと思ってきた。わがままになる対象がきわめて限られていたのだ。
わがままが出るようなときは、もっと自分を信用するといい。わがままを究めればいい。僕の中のこどもが、そう主張していた。
ふたごがどうして僕を呼んだのかわからないまま、滞りなく進む柳さんの調律を見ていた。端正な調律だった。ついてまわっているときはわからなかった。ひとりでやるようになってからあらためて見ると、一連の作業が非常に丁寧であることも、柳さんの手先がとても器用なことも、よくわかる。真似をしなくていい。誰もがこんな調律ができるわけではない。でも、ひとつのお手本だ。④つくづく、見習い期間中にこの人に教わることができてよかったと思う。
「終わりました」
ドアを開けて、柳さんが声をかける。すぐに奥さんとふたごが入ってきた。
「前と同じ状態に調律しておきました」
柳さんが簡単に説明すると、⑤由仁は少し不服そうだった。
「あのう、私たちは前と同じじゃないですけど」

まっすぐに柳さんの目を見ながら言う。

「ピアノは同じにしておくほうがいいと思います。あなたたちが変わったのなら、きっと以前とは違う音色になります。それを確かめるのも大事なことだと思います」

由仁はわずかに首を傾けたまま黙っていたが、僕を見て言った。

「外村さんはどう思いますか」

僕がどう思うか聞きたくて呼んだわけではないと思うのに。しばらく由仁のまなざしを感じていたが、

「わかりません」

正直に答えると、視線が外されるのがわかった。

「弾いてもらわないと、わかりません。試しに弾いてみてもらえますか」

和音がうなずいた。

以前は、試しに弾くのも*連弾だった。ピアノの前にふたりで並んですわっていたふたご。観る、などと言うと芸か何かのようだけれど、艶のある黒い楽器の前に、ふたごが並んですわったとき、聴くよりもまず観るよろこびが胸の中で弾けた。こんなにいいものを僕ひとりで観てしまっていいのか、という思い。どこかの音楽家によってあらかじめ書かれていた曲だとは思えないほど、ピアノから生まれてくるのは彼女たちの音楽だった。

由仁のピアノは魅力的だった。華やかで、縦横無尽に走る*奔放さがあった。人生の明るいところ、楽しいところを際立たせるようなピアノ。対して、和音のピアノは静かだった。静かな、森の中にこんこんと湧き出る泉のような印象だ。これからどうなるのだろう。ふたりのピアノがひとりのピアノになって、それでも泉は泉でいられるのだろうか。

でも、和音がたったひとりでピアノの前にすわったとき、はっとした。背中が毅然としていた。白い指を鍵盤に乗せ、静かな曲が始まった瞬間に、記憶も雑念も、どこかへ飛んでいってしまった。

音楽が始まる前からすでに音楽を聴いていた気がした。今このときにしか聴けない音楽。和音の今が込められている。でも、ずっと続いていた音楽。短い曲を弾く間に、何度も何度も波が来た。和音のピアノは世界とつながる泉で、涸れるどころか、誰も聴く人がいなかったとしてもずっと湧き出続けているのだった。

ピアノの向こう側に、和音を見つめる由仁の横顔があった。⑥頰が紅潮している。由仁は弾けなくなったのに、和音は弾く。耐えられるだろうか、と案じてしまったことが恥ずかしい。由仁こそ和音の泉を一番に信じていたのだろう。

短い曲が終わった。調律の具合を確かめるための軽い試し弾きかと思ったけれど、違った。和音の決意がはっきりと聞こえた。和音は椅子から立ち上がり、こちらに向かってきちんとお辞儀をした。

「ありがとうございました」
こちらこそ、と答える代わりに拍手をした。由仁も、奥さんも、柳さんも、拍手をしていた。
「心配かけてごめんなさい」
和音が言った。そうして、次の言葉を発するために息を吸い込んだときに、僕にはもう和音が何を言おうとしているのかわかってしまった。
「私、ピアノを始めることにした」
和音のピアノはもう始まっている。とっくの昔に始まっている。本人が気づいていなかっただけで。ピアノから離れることなんて、できるわけがなかった。
「ピアニストになりたい」
静かな声に、確かな意志が宿っていた。まるで和音のピアノの音色みたいに。由仁の頭がぴょこんと跳ねた。
「プロを目指すってことだよね」
晴れやかな声だった。うきうきと弾む声。和音はようやく表情を和らげてうなずいた。
「目指す」
「ピアノで食べていける人なんてひと握りの人だけよ」
奥さんが早口で言った。言ったそばから、⑦自分の言葉など聞き流してほしいと思っているのがじんじん伝わってきた。ひと握りの人だけだからあきらめろだなんて、言ってはいけない。だけど、言わずにはいられない。そういう声だった。
A「ピアノで食べていこうなんて思ってない」
和音は言った。
B「ピアノを食べて生きていくんだよ」
部屋にいる全員が息を飲んで和音を見た。和音の、静かに微笑んでいるような顔。でも、黒い瞳が輝いていた。きれいだ、と思った。
いつのまに和音はこんなに強くなったんだろう。ほれぼれと和音の顔を見る。きっと前からこの子の中にあったものが、由仁が弾けなくなったことで*顕在化したのだと思う。そうだとしたら、悪いことばかりじゃない。由仁のことはとても残念だけれど。とても、とても残念だけれど。
「玉のようで」
口に出すと少し恥ずかしい。
「光のようで、森のようで――うまく表現できないですけど」

隣を歩く柳さんが、前を見たまま言う。

「和音ちゃんのことだろ」

うなずいた。正確には、和音のピアノだ。音と音が転がって、絡みあって、きらきらした模様をつくる、和音のピアノ。

「よかったなあ」

しみじみと、柳さんが口にする和音への祝福。

「ほんとうによかったです」

僕が呼ばれた意味がわかった。和音は決意を見せたかったのだ。精いっぱい胸を張って、一歩を踏み出した和音。上がった右足が、目に見えたような気がした。歩幅は小さくても、何かに導かれるみたいに迷いのない爪先。それを下ろした先は、まっすぐ遠くへつながっている。

（宮下奈都『羊と鋼の森』より）

（注）＊調律……楽器の音の高さを特定の標準音と音律に従って整えること。

＊連弾……一台のピアノを二人で弾くこと。

＊奔放さ……常識にとらわれず、自分の思うとおりにふるまうさま。

＊顕在化……はっきりと形にあらわれること。

問一 ――――①「ぞくぞくした」とありますが、「僕」はなぜ「ぞくぞくした」のですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　由仁がピアノが弾けなくなり、二人で弾く魅力が半減した中でも「僕」を感動させる技術を和音が持っているから。

イ　防音装置によってピアノの音が半減している状況でも「僕」を感動させるピアノが弾ける和音の実力を想像したから。

ウ　「僕」を感動させた和音のピアノの力は、防音装置が施された状況によってしか可能にならないのだと知ったから。

エ　和音が弾くピアノの音ではなく、実は「僕」が和音その人自身に魅力を感じていたことに初めて気づかされたから。

問二 ――②「もったいない」と同じ種類の語を、次の――部の語の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア このままではよくない結果になりそうだ。
イ こどもはあぶない場所には近づかない方が良い。
ウ 目にみえないものにこそ大切な意味がある。
エ いつも兄と比較されるのはおもしろくない。

問三 ――③「なんだか気持ちが軽くなった」とありますが、なぜ「気持ちが軽くなった」のですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「通したい我」がなかった自分にもようやく「我」が出来たことで自分が大人に成長したように思っていたが、逆に「我」を通したことを「こどもかよ」と言われ、びっくりしたから。
イ ずっと大人らしく、自分の中の「こども」を否定しながら生きてきたことが不安だったが、「こどもかよ」と言われたことで、自分の中にも確かに「こども」がいたことがわかり安心したから。
ウ 何事に対しても要領よくできる弟に対して、兄の威厳を保つことに疲れていた不器用な自分が、わがままな「こども」と言われたことでなぐさめられたように感じたから。
エ わがままな「こども」と言われたことで、自分が何事にも「どうでもいい」と思ってきたからわがままになれなかったのだと気づき、今は自分にもこだわるものが出来たことに新鮮な喜びを覚えたから。

問四 ――④「つくづく、見習い期間中にこの人に教わることができてよかったと思う」とありますが、なぜ「僕」はそう思ったのですか。その理由の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 調律に関してなにも知らない見習い期間に、複数の人の調律の仕方を見てしまうと、正しいやり方がわからなくなるから。
イ 調律に対してやる気の充実した時期に、手本となる調律を間近に見られ、その真似をすることで調律の仕方を体得できたから。
ウ 調律を一から学ぶ期間に、誠実で的確な調律を間近で見る機会を得たことで自分の仕事の基礎を作ることができたから。
エ 基礎知識だけあって実践をしていない段階なので、ていねいな調律の作業を見せてもらえると理解がしやすかったから。

問五 ——⑤「由仁は少し不服そうだった」とありますが、由仁は「以前と同じ状態」の調律ではなく、どのような調律をしてほしかったのですか。二十字以上三十字以内で説明しなさい。

問六 ——⑥「頬が紅潮している」とありますが、この時の由仁の心情として適当なものを次から**二つ**選び、記号で答えなさい。

ア 喜び　イ 怒り　ウ 興味　エ くやしさ　オ 興奮　カ 恥ずかしさ

問七 ——⑦「自分の言葉など聞き流してほしいと思っている」とありますが、この時の奥さんの気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 病気でピアノをあきらめた由仁の前なので、手放しで和音の決意をうれしがることはできないが、気の弱い和音が自分の言葉で決意を変えてしまうことを恐れる気持ち

イ 親として現実の厳しさを教えなければいけないと思いながらも、和音がピアニストになる、と決意したことをうれしく思い、応援したい気持ち

ウ 音の専門家である調律師が二人もいるところで、ピアニストになる、という和音の決心を全面的に肯定することははばかられるが、娘の思いをかなえてあげたいと願う気持ち

エ ピアノで生活できる人はごく限られた人だから無理な夢だとわかっていても、再びピアノを弾こうとする和音への思いを切り捨てられない気持ち

問八 〰〰A『ピアノで食べていこうなんて思ってない』・〰〰B『ピアノを食べて生きていくんだよ』とありますが、「ピアノで食べていく」と「ピアノを食べて生きていく」とではどのような意味の違いがありますか。その説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア Aは生活のためにピアノで稼いでいくという意味だが、Bは自分が自分らしく生きるためにピアノを弾いていくという意味

イ Aはピアノに関係する仕事に就いて生きていくという意味だが、Bはお金を得るためにピアノを利用することはないという意味

ウ Aはピアノ教室の先生や伴奏者などとして生きていくという意味だが、Bはプロのピアニストとして生きていくという意味

エ Aは聴いてくれる人のためにピアノを弾くという意味だが、Bは自分自身のためにピアノを弾くという意味

三　次の①から⑧の――部のカタカナを漢字になおし、⑨から⑫の――部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

① 優勝するには全員のケッソクが必要だ。
② 北陸地方をケイユして京都に向かう。
③ 新しい環境にテキオウするのは大変だ。
④ 子どものジュンシンな気持ちを大切にする。
⑤ 駅前のナミキミチを散歩する。
⑥ 茶わんをネットウ消毒する。
⑦ 地震後すぐに友のアンピを確認する。
⑧ 友人から植物図鑑をカりる。
⑨ 二月には割安で旅行ができる。
⑩ 身の潔白を証明する。
⑪ 残飯を有効に活用する方法を考える。
⑫ 千変万化の様相をていする。